美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2023 January/February
TAKE FREE
NO.75

特集
詩人 茨木のり子
との対話

庄内憧憬
後藤正治
ノンフィクション作家

Cradle 1
美しくなつかしい、日本をのせて。
［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌
2023 January/February
令和5年1月1日発行（偶月奇数月発行）第13巻3号（通巻75号）
発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／庄内平野に昇る朝日

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

藤沢周平と茨木のり子

後藤 正治

ともに、作風はつつましやかであり、声高に何かを主張することはなかったが、芯に強靭なものを宿した、広義のリベラリストであったと思う。

時代小説家・藤沢周平氏の一ファン読者であり続けてきた。山形・鶴岡の地をはじめて訪れたのは十数年前のこと。雑誌のグラビア特集に短文を添える仕事が舞い込み、喜んで引き受けた。

旧黄金村高坂（現鶴岡市）の生家跡、旧庄内藩の鶴ヶ岡城跡、藩校致道館、映画『蟬しぐれ』で使われたカヤ葺きの家屋……などを回った。

秋の日。近隣の農地は、刈り取りを待つばかりの黄金色に染まった稲穂の波が広がっている。美田という言葉を想起した。あぜ道にたたずんでいると、どこからか虫の声が湧き、頬に触れる微風が心地よい。氏の愛した風土がふと知覚されて感じられるのである。

以降も鶴岡を訪れる機会に恵まれたのは、詩人・茨木のり子氏の評伝（『清冽』）を手がけた故である。

茨木は愛知・西尾で育っているが、生母は東田川郡三川町の出で、茨木の少女時代に亡くなっている。若き日、また家庭をもって東京暮らしになって以降も、茨木は母の故郷をしばしば訪れている。医師だった夫が鶴岡の出身ということもあったろう。

母の実家は、広い敷地に建つ堂々たる農家である。茨木のいとこにあたる当主の大瀧良三氏と座敷で向かい、思い出話をうかがった。往時、大瀧家は庄内平野有数の地主であったという。

藤沢は昭和二年、茨木は大正十五年生まれ。少年・少女期は戦争期で、思春期に時代の激動を味わった世代である。二人に直接のかかわりはないが、その精神において相通じるものを感じた。ともに、作風はつつましやかであり、声高に何かを主張することはなかったが、芯に強靭なものを宿した、広義のリベラリストであったと思う。

高坂と三川町は、JR鶴岡駅を挟んで南北に位置するが、直線距離にすればさほどでもない。当地を訪れる機会が重なるなかで、そういえば……ということで気づいたことだった。

鶴岡駅の近くで、ぶらっと居酒屋に入ってカウンターに座った夕がある。味噌を添えたハタハタが美味しく、藤沢作品に登場する食の場面を思い浮かべたりした。

かように、仕事がらみではあったが幾度か鶴岡を訪れてきた。従来、自宅で食べるお米は生協から北陸産のものを取り寄せてきたが、当地を知って以降、「つや姫」に取り替えている。にわか〝庄内ファン〟のなせることである。

黄金色に染まる庄内の“美田”。金峯山などの山並みが奥に広がる。

ごとう・まさはる／1946年、京都市に生まれる。ノンフィクション作家。『リターンマッチ』（文春文庫）で大宅壮一ノンフィクション賞、『遠いリング』（講談社文庫）で講談社ノンフィクション賞、『清冽 詩人茨木のり子の肖像』（中央公論新社）で桑原武夫学芸賞を受賞。近著に『奇蹟の画家』、『天人 深代惇郎と新聞の時代』、『拗ね者たらん 本田靖春 人と作品』（いずれも講談社文庫）など。『後藤正治ノンフィクション集』（プレーンセンター）は全10巻を刊行。

特集

詩人 茨木のり子との対話

国語の教科書で初めて目にし、
10代の心に静かに、そして鋭く刻まれた一篇の詩
「私が一番きれいだったとき」「自分の感受性くらい」。
その後、世代を越えて人々に広く読み継がれる数々の詩の作者が
庄内と深いつながりがあると知ったのは、いつのことだったか。
没後16年を経た今も、庄内には
「のり子さん」と親しく呼ぶ親類たちがいて
その詩を生きる力にして暮らす多くの人たちがいます。
茨木さんが愛してくれた庄内から、敬愛を込めて。

写真提供：宮崎治、三浦宏平、茨木のり子六月の会
トビラ撮影協力：古今cocon（鶴岡市山王町）
参考資料：後藤正治著『清冽　詩人茨木のり子の肖像』2010年／中央公論新社
戸村雅子著『茨木のり子への恋文』2016年／刊行事務局
『別冊太陽　茨木のり子　自分の感受性くらい』2019年／平凡社
「西尾市岩瀬文庫特別展　茨木のり子没一〇周年」2015年／カタログ
「徳島県立文学書道館文学特別展　没後10年　詩人・茨木のり子の世界」2016年／カタログ
「茨木のり子　六月の会」会誌

〈特集〉
詩人
茨木のり子との
対話

〝のり子さん〟と庄内

三浦 宏平さん
鶴岡市在住。夫・三浦安信の兄の長男。元三浦産婦人科医院院長。10代の終わりに茨木夫婦の新居に下宿した経験を持つ。

＊

好きな詩
「自分の感受性くらい」

『自分の感受性くらい』
2010年／花神社

〝自分の
感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ〟

戦後、いち早く詩の活動を始め、「現代詩の長女」と呼ばれた茨木のり子。今なお老若男女のファンに愛される詩人と庄内との関わりは、母が庄内、三川町出身だったことから始まります。

大正15年に医師・宮崎洪（ひろし）、母・勝の長女として大阪で生まれた茨木のり子。愛知県西尾市に転居後、小学生になると春休みや夏休みには毎年のように母や弟と汽車を乗り継いで庄内を訪れ、母の生家・三川町の大瀧三郎右衛門家に長期滞在していました。その後、11歳で母を亡くしてからも庄内の親族との親交は続きます。

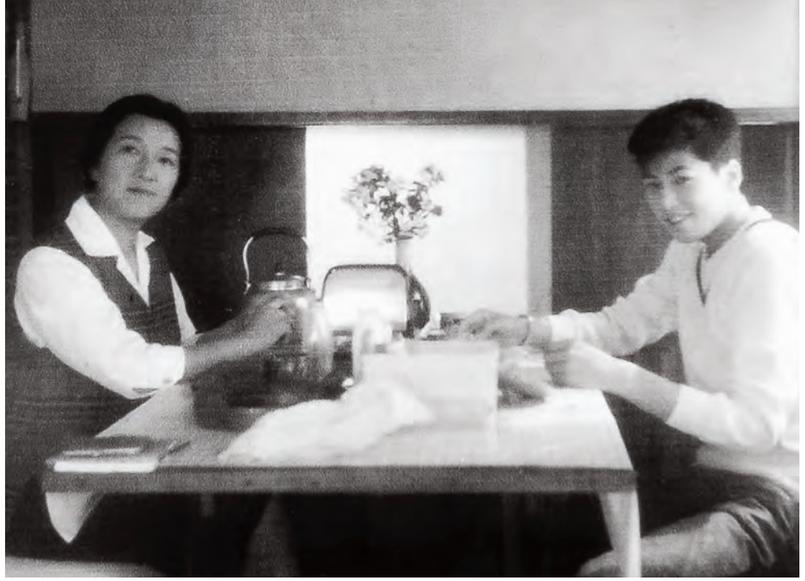
まもなく時代は太平洋戦争へと突入し、西尾での高校時代と東京での薬学生時代は「いっぱしの軍国少女」（「はたちが敗戦」）に。戦後は復活した新劇に新たな時代の希望を見出し、昭和21年、読売新聞社主催第1回「戯曲（ぎきょく）」募集に応募。選外佳作に入選し、世田谷の鶴岡出身者の民家に下宿しながら、戯曲や童話の制作に邁進しました。

鶴岡で縁談の話が進められたのは、ちょうどこの頃です。相手は東京で医師をしていた鶴岡出身の三浦安信。茨木のいとこ・吟の夫があつみ温泉「萬国屋」の18代本間儀左衛門で、その儀左衛門のいとこが安信という血縁関係のつながりが元となりました。出会った翌年の昭和24年、23歳で結婚。2人は埼玉で新婚生活を始めます。

昭和25年、戯曲のせりふに詩的な言葉が足りないと感じた茨木は、詩の創作を開始。ラジオから流れてきた謡曲「茨木」をペンネームにして、詩学研究会の『詩学』に詩を発表しました。詩人・茨木のり子の誕生です。28年には詩人の川崎洋に誘われ、同人雑誌『櫂（かい）』を創刊。谷川俊太郎や酒田市出身の吉野弘なども仲間に加わり、30年には29歳で初めての詩集『対話』を刊行、31歳で『詩文芸』に「わたしが一番きれいだったとき」を発表し、〝現代詩の長女〟としての名声を高めていきます。

昭和34年、甥の三浦宏平さんが医学部を受験するために鶴岡から上京し、茨木夫婦の自宅に2年ほど下宿します。保谷（ほうや）市（現・西東京市）東伏見に新居を建てた翌年でした。

昭和24年11月、結婚式は安信の鶴岡の生家、披露宴は料亭「新茶屋」で開かれた。



昭和34年頃の三浦宏平さんと茨木のり子。保谷市（現・西東京市）東伏見の新居にて。

「とにかく穏やかでやさしくて、お似合いの2人でした。叔父は日曜日、ソファに座ってお酒をちびちび飲みながらクラシックを聴くのですが、その姿をのり子さんが少し離れた食卓からただ黙って見つめているんです。その姿がご夫婦のすべてを表していましたね」。

昭和36年、安信がくも膜下出血を発症し、うつ傾向が生じるように。安信を亡くしたのは「自分の感受性くらい」を発表した4カ月後の50年、49歳の時でした。「戦後を共有した一番親しい同志を失った感が痛切にきて虎のように泣いた」茨木は、その悲嘆から一歩を踏み出そうと、翌年には韓国語を習い始め、平成2年に『韓国現代詩選』を刊行、読売文学賞を受賞します。他にも詩集やエッセイ本を次々と刊行し、平成11年刊行の『倚（よ）りかからず』は詩集としては異例のベストセラーを記録しました。

平成18年2月、くも膜下出血のため東伏見の自宅で死去。享年79歳。同年4月、鶴岡市加茂の浄禅寺にある三浦家の墓に納骨されました。宏平さんはこの時のことを「お墓にのり子さんのお骨を納めた途端、不思議なことに周りがパッと明るくなったのです。のり子さんと叔父が一緒になれたことを喜んでいると感じました」と振り返ります。

三川町出身の母に生まれ、鶴岡出身の夫を持ち、生涯を通じて庄内と関わり続けた詩人茨木のり子は今、日本海を見渡す場所に最愛の夫と静かに眠っています。

茨木が亡くなる3年前の平成15年、鶴岡市湯野浜の三浦宏平宅にて。夫安信が亡き後も三浦家との親交は続いた。

茨木のり子が眠る鶴岡市加茂の浄禅寺には、今も全国から茨木のファンが訪れる。

〈特集〉
詩人
茨木のり子との
対話

庄内弁は詩人・茨木のり子の母語

戸村 雅子さん
鶴岡市在住。元山形県立高校教諭。平成28年出版の『茨木のり子への恋文』で高山樗牛賞などを受賞。「茨木のり子 六月の会」事務局長。

＊

好きな詩
「古歌」（『歳月』所収）

『茨木のり子全詩集』
2010年／花神社

〝わたしの
貧しく小さな詩篇も
いつか誰かの哀しみを
少しは濯ぐことも
あるだろうか〟

日常の暮らしの中で生まれる感性や言葉を大切にして詩を綴ってきた茨木のり子。母と夫のふるさとである庄内は茨木にとってどのような存在だったのでしょうか。『茨木のり子への恋文』の著者、戸村雅子さんから、その詩人と「庄内弁」について寄稿していただきました。

茨木のり子の「訛（なまり）」（『茨木のり子全詩集』）は、鶴岡出身の夫、医師の三浦安信をうたった詩だ。

無口なひと
しゃべることのきらいなひと
電話はアレルギーを起すほど
訛があらわに伝わるのがいやなので
すね
でも
す　と　しがごっちゃになったって
それがどうしたというのでしょう
わたしがあなたに惹かれたのは
紬のようなその東北訛のせいですのに
〔中略〕
あなたの言葉のニュアンスに
幼い日　逝ってしまった母の
奥の細道ことばが　やさしくだぶって
くるようです

茨木37歳の詩。この2年前、安信はくも膜下出血を患った。時間はかかったが職場復帰を果たした。しかし以後、うつ傾向となり「無口なひと」となった。鶴岡中学時代は水泳部で活躍したスポーツマン。若い頃友だちに「『進化論と進化思想』について2時間にわたってレクチャーした」（岩崎勝海「三浦安信・のり子夫妻」）という雄弁な人でもあった。

昭和22年に鶴岡で撮影されたお見合い写真。この訪問着と花嫁衣装は石黒家のもので、今も同家に現存している。

昭和28年5月の27歳の時、夫の三浦安信と吉良吉田海岸（愛知県）にて。

三浦安信は大阪帝国大学医学部を卒業し医師となる。安信は庄内弁の人で、それゆえ訛りに引け目を抱いていた。この時代、東北人であれば訛りに劣等感を持つのは当たり前で、長く東北人はそれをバカにされ差別されていた。その歴史をたどれば、大和朝廷に討伐された蝦夷のアテルイ時代までさかのぼる。

しかし「訛」はこの詩の中で「紬のような東北弁」となり、「奥の細道ことば」と変化する。

東北の負の遺産である敗北者の訛りを背負い、電話も怖がる夫に、茨木は「あなたに惹かれたのは紬のような東北弁を話す人だったからよ」と、励ましを込めてやさしく、強く愛を伝える。あなたは紬のように手触りごつごつ、でもぬくぬくの人なのだと。

最終行で「訛」は「奥の細道ことば」となる。「白河以北一山百文」との言葉は、東北一帯は何によらず値打ちが低いことを指すが、芭蕉は東北にこそ言葉の宝の山があると「風雅の誠」を求めて道なき道に分け入り、後世に残る紀行文を成した。

誇るがいい。「奥の細道ことば」を。「あなた」は医師であり、風雅・文化芸術を愛する心豊かな人である。言葉は人格。「訛」もあなたの人間としての尊厳を損ねたりはしない。

茨木のり子の母親、宮崎勝も庄内弁の人である。のり子は胎内にいる時からその柔らかな響きを体に沁みこませ、生まれてからは母の庄内弁をたっぷり浴びて育った。11歳の時に母と死別する。その頃まで母が子どもに語りかける言葉といえば、ほとんどがやさしさや愛を伝え、願いや希望を語りかける言葉だったのではないだろうか。茨木の人間としての核につながる本質的なものは、庄内弁を通して体に組み込まれたものと思われる。

庄内弁は茨木のり子の母語である。安信との出会いについては、庄内にいる血縁で濃く結ばれた伯母やいとこ、祖母たちの温かな期待とやさしい配慮があった。

「のりちゃんさ、あの人　いなでね」
「んだの、のりちゃんの家もあの人もお医者さんだしの」

まわりのお膳立てで見合いをした2人は、お互い一目惚れだった。安信の庄内弁がのり子の庄内弁が宿る魂と響き合い、深いところでキャッチし合った。

庄内弁で結ばれた2人である。

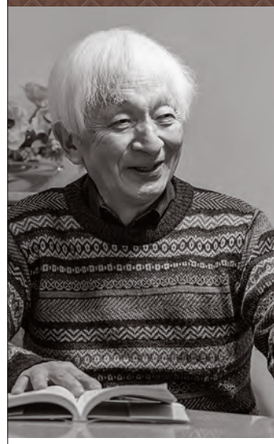
「わたしがあなたに惹かれたのは紬のようなその東北訛のせい」

昭和12年に鶴岡で撮影された母・勝との写真。勝が結核で亡くなる4カ月前。

平成19年刊行の『歳月』（花神社）は、亡き夫への思いが綴られた愛の詩集。茨木の死後、甥の宮崎治さんが「Y」と書かれた箱の中に原稿を発見し、茨木の遺志に沿って世に出した。

〈特集〉
詩人
茨木のり子との
対話

詩と詩人を愛する人々



黒羽根 洋司さん
茨木のり子 六月の会代表。元医療法人黒羽根整形外科理事長。自ら随筆や評伝を書き、2010年、高山樗牛賞を受賞。

＊
好きな詩
「花の名」（『鎮魂歌』所収）

『茨木のり子集 言の葉1』
2010年／筑摩書房

〝いい男だったわ
お父さん
娘が捧げる
一輪の花〟

茨木のり子の人生と詩を語り継ぐ人たちが、全国で活動を続けています。〝母のふるさと〟であり、茨木が眠る庄内で発足した「六月の会」は詩人とその詩を心から愛し、言葉が持つ力を広く伝えてきました。

茨木のり子が逝去した翌平成19年6月、鶴岡市中央公民館で「茨木のり子の世界」と題した追悼公演が行われました。地元有志による実行委員会が主催し、庄内ゆかりの詩人の生き方と詩に共感する人々で昼夜2回公演の会場は超満員に。プロ、アマの劇団が共演して朗読劇を繰り広げました。同年10月、公演の実行委員を中心に「茨木のり子 六月の会」が発足。茨木の誕生月であり一篇の詩題を冠したその会は、現在会員数を全国250名超にまで増やし、活発な活動を続けています。

どこかに美しい人と人との力はないか
同じ時代をともに生きる
したしさとおかしさとそうして怒りが
鋭い力となって　たちあらわれる
――「六月」『見えない配達夫』より

六月の会の目的は「茨木のり子の詩と生涯を、庄内・鶴岡との関わりの中で理解し、深める」「茨木のり子の心のふるさとである庄内から『茨木のり子』を発信する」こと。隔月発行の会報誌は令和4年現在91号を数え、ほぼ年1回のペースで茨木にゆかりのある講師を迎えて講演会や朗読会、コンサートを主催してきました。また、茨木が育った愛知県西尾市の「詩人 茨木のり子の会」をはじめ、西東京市の「茨木のり子の家を残したい会」など他組織との交流も生まれました。「庄内は一つのメッカとなって、茨木さんとその詩を通して、全国のすばらしい方々と出会えたのは幸せなことです」と話すのは代表を務める黒羽根洋司さん。黒羽根さんが茨木の詩と出合ったのは、開業医時代に東京の書店で手にした『言の葉さやげ』（花神社）で、茨木が庄内に縁あることを知ったのがきっかけでした。自身と同じく医師を父に持つ茨木の境遇に共感を覚えるという黒羽根さん。「花の名」のようにドラマ性があり、対話するかのようなその詩は、何年を経ても強いインパクトをもって迫ってくると話します。「茨木さんは生活から生み出した深い思想を、易（やさ）しい言葉でつづり続けました。よく茨木さんの詩は『向日性』と例えられます。卓越したユーモア、軽快なリズムにのせた詩は、じつは青春を奪った戦争や国家権力への批判精神、怒りや怨念、自戒に根差していると考えます。権威を頼まず、依存せず。覚悟を持って表現し、希望を語って潔く生きたその詩からは、人間の肉声が聞こえてくるようです」。

六月の会は、作家の命日などにその功績を偲ぶ文学忌とは異なる形で、茨木とその詩を愛する心一つで息長く続いてきました。「茨木さんの詩は、日常の生活から失いかけているもの、忙しさの中で取り落としているもの、考えたくなくて忘れようとしていることに気づかせてくれます。政治家の言葉は劣化し、情報過多ゆえに考えることを放棄した人の多いこの貧しい現代に、茨木さんから深い問いを突きつけられている気がします」。

心の中に生きる詩人は永遠であり、優れた詩句は不死であることを私たちに教えてくれる、と黒羽根さん。

死こそ常態 生はいとしき蜃気楼
――「さくら」『食卓に珈琲の匂い流れ』より

人生という蜃気楼を生きる私たちに、茨木の詩は「志」の言葉で語りかけてきます。

「六月の会」発足のきっかけとなった平成19年の茨木のり子追悼公演では、劇作家兼演出家の小田健也氏率いるプロの劇団と地元の劇団「だいこん座」が共演。茨木の詩を満席の聴衆が堪能した。

発足から15年が過ぎた「茨木のり子 六月の会」。会員の人脈と熱意によって、会報には毎号、著名かつ多彩で表現に優れた執筆陣が名を連ねる。

六月の会では、茨木のり子の甥・宮崎治さんの厚意で西東京市にある生前の茨木の邸宅に研修で訪れている。みかんの木や書棚など茨木の存在を感じた貴重な経験となった。

〈特集〉

詩人 茨木のり子との対話

喋りたいことが　いっぱい
聞いてもらいたいことが　綿々と
〔中略〕
なぜか聞き役ばかりさせられる
それは聞き星という運命の星
なぜか訴えてばかりいる
それも囀り星といういい気な星
聞き星よ　歎かないで
秘密の話で満杯になったとしても
不機嫌のいがいが出すのはよして
あまり甘くない金平糖ぐらいの星にはなって
星座表にはあらわれない
浮世の星ではあるけれど
よく見える　眉ダイヤのように
昼も夜もかすかに瞬いているのが

――――「聞き星」より

白っぽい街道すじに
〈お休みどころ〉という
色褪せた煉瓦いろの幟がはためいていた
〔中略〕
無人なのに
茶碗が数箇伏せられていて
夏は麦茶
冬は番茶の用意があるらしかった
〔中略〕
「お休みどころ……やりたいのはこれかもしれない」

――――「お休みどころ」より

駅に
降りたったとき
あまりにも深い雪で
バスも車も見当たらなかった
一台の橇をみつけて頼み
〔中略〕
あとさきも考えず
なにもかもほったらかして
二人で突っ走れたのかもしれない
なぜ　そうならなかったのだろう
この世から　あの世へ
越境の意識もなしに
白皚皚の世界を
蒼い月明のなかを

――――「橇」より

風がアカシヤの匂いを運んでくる
或る夏のこと
林を縫う小さなせせらぎに　とっぷり躰を浸し
ああ謝々　おてんとさまよ
日本の山野を逃げて逃げて逃げ廻っている俺にも
こんな蓮の花のような美しい一日を
ぽっかり恵んで下されたんだね
木洩れ陽を仰ぎながら
水浴の飛沫をはねとばしているとき
不意に一人の子供が樹々のあいだから
ちょろりと雫れた　栗鼠のように

――――「りゅうりぇんれんの物語」より

茨木はその著の中で、いい詩には心を解き放つ力があり、
いい詩はいとおしみの感情を誘い出してくれると言っています。
日々の喜怒哀楽に寄り添い、励まし、時に人生の示唆となる。
そんな一篇との出合いが、あなたにもありますように。

参考＝『詩のこころを読む』（1979／岩波ジュニア新書）

茨木のり子の詩を人生の傍らに

「茨木のり子 六月の会」事務局／鶴岡市

高樹 陽子さん

『寸志』
1982年／花神社

医師から父のがんを宣告された。家族は父に告知しなかった。父から「俺の体はどうなっていんなだ」と問われる度、私ははぐらかし、口にできない諸々が胸底に溜まった。父のいない所でそれを吐き出したくて叔母に会えば、お姑様をくどくマシンガントークに先を越され、まさに囀り星と聞き星の図。その頃、この詩と出合った。茨木さん、私を見ていてくれたの？　私の胸中をこんなに代弁してくれて。

以来、茨木作品をむさぼった。複数の本から良いなと思う詩や随筆を抜き書きし、私だけの茨木のり子ノートを作った。それを常に枕元に置いた。夜中に目覚めて、父はよく眠れているかなと思った瞬間から、私は不安の底なし沼にはまりそうだった。私を支え、不安沼の縁から救ってくれたのが茨木さんの言葉だった。さまざまの茨木語は私の精神安定剤だった。

茨木さん逝去の年の大晦日、父も亡くなった。葬儀を終えてすぐ、私は「茨木のり子一周忌追悼の集い」実行委員会に参加した。後に茨木のり子六月の会事務局に入り、一人で読んでいた茨木作品を今は仲間と読み合っている。

鶴岡市大山自治会事務局長／鶴岡市

高橋 久史さん

『倚りかからず』
1999年／筑摩書房

かつて参加した朗読会でぼくが選んだ茨木さんの詩は、「行方不明の時間」でした。「すべては／チャラよ」の啖呵も鮮やかな。

前職は営業職。もとより内向的なぼくに、お客様という神様相手の苦しい日々が続きます。積み重なる重圧を、この詩を読むことで昇華させていたのかも。

定年から程なくして今の職を得て。相変わらず人間相手の仕事ながら、地域に寄り添う毎日に然迄ストレスは感じません。とはいえ今や歳を重ねて現役引退間近の身の上。だから時に反芻するのです。ぼくが本当にやりたかったことはなんだろう？

「お休みどころ」という詩の中で、十五歳の少女・茨木のり子は煉瓦いろの幟を見てぼんやりと考えます。「やりたいのはこれかもしれない」。夏は麦茶、冬は番茶の用意がある、無人なのにどこか人の気配が漂うお休みどころ。

齢六十七のぼくは考えます――ぼくがやりたかったのも、これだったかもしれない。失敗ばかりの人生だった。それでも最後にお休みどころの幟を立てることができたら、少しは癒しになり、償いにもなるだろうか、と。

シテの会 同人／酒田市

金井 ハルさん

『歳月』
2007年／花神社

茨木のり子は最愛の夫と共に「白皚皚の世界を」「蒼い月明のなかを」同じ橇に乗って「この世からあの世へ」行きたかったのだ。『歳月』という詩集は最愛の夫への熱いラブレターである。果たして私はあなたに「息せききって」ひたすら走り、「あとさきも考えずなにもかもほったらかして」突っ走るだろうか。ひっそりとラブレターを書くのだろうか。

幼なじみの友が3年ぶりに酒田に帰ってきた。彼女は夫を以前にがんで亡くしている。余命半年と言われた夫を献身的に介護し、看病した話を聞いた。若い頃は喧嘩ばかりしてきた夫婦だそうで、その償いのためにも仕事を辞めて、四六時中彼と一緒に過ごしたそうだ。そのおかげか半年といわれた命はその後2年も生き延びて、2人でたくさんの思い出を作り、お互いの打ち明け話もできたと、しんみりと、それでもどこかキラキラと話す彼女。やがて夫は自分の胎内にいるアカゴのようになってきたと言う。可愛くていとしくて、ずうっと抱いていたあの時間があるから、私は今生きていられると微笑む。

果たして私は…と、今考えている。

酒田詩の朗読会 主宰／酒田市

阿蘇 孝子さん

『鎮魂歌』
2001年／童話屋
※思潮社版（1965）は絶版

昭和33年2月9日、北海道当別の山中で、猟師が、垢まみれ全身に凍傷を負っている男を発見した。

昭和17年、東条英機内閣で閣議決定された〝華人労働者移入方針〟によって、当時日本軍の占領下にあった中国山東省から捕縛され強制連行された劉連仁という農民だった。のちに『穴にかくれて14年』（欧陽文彬著、三好一訳）としてまとめられたこの著書を読んで、茨木さんは、500余行からなる朗読のための詩「りゅうりぇんれんの物語」を書き上げる。

ある日突然、理不尽にも日常を奪われ、外国に連れ去られ、そこで過酷な労働を強いられ、逃走した男の、孤独なしかして激烈な体験を、静かに、時に包み込むように誕生させた。憤りと哀しみの間で揺れながら、それでいて揺るぎない言葉で、戦争という蛮行を告発する。他者の身の上を自身に投影し、弱き者に寄り添い、そして、抱きしめる。詩人の真骨頂がここにある。最終35行に顕現する、願い、祈り。その心根に熱いものがこみ上げる。劉連仁に起きた不幸を描きながら、詩人は、私たちに問いかける。戦争とは何か。人間とは何か。その問いは、色褪せない。

行沢とちの実会のとちもち

山里のお母さんたちが
数多くの手間をかけて作る
鶴岡名産とちもちは
芳醇なとちの香りと黒糖のようなコクが
ふわりと広がるふるさとの味

詩人茨木のり子の詩集『歳月』に、「栃餅（とちもち）」というタイトルの詩がある。5歳の子どもが祖父と山菜を採りに行くが、忘れ物を取りに戻った祖父から「深山幽谷」に置き去りにされて泣き叫び、祖父から麓の山湯でとちもちを買ってもらってようやく泣きやむ。鶴岡出身の夫、三浦安信の子ども時代の思い出話を元にしたものである。

とちもちはもち米ととちの実で作る鶴岡に古くから伝わる食べ物だ。こしあんとの相性が良く、市内各地の菓子店などで製造販売している。ただとちの実は、あく抜きに相当な時間と手間を要するため、店の多くがあく抜き後のものを購入している。その下処理を手がけるのが山間部の人たちで、中でも高い生産量を誇るのが旧朝日村（現鶴岡市）の行沢（なめざわ）だ。この地は江戸時代に植林されたとちの木の山を有し、人々は実を拾ってあくを抜き、とちもちを作って正月などハレの日に食べ、また地域外に販売して生計を立ててきた。この山の営みを守るため、昭和55年にとちもちの製造販売を始めたのが「行沢とちの実会」である。以来、行沢はとちもちの里として知られ、現在は2代目のお母さんたちがとちの実拾いから販売までを行い、全国に素朴でやさしい山里の味を届けている。

茨木の「栃餅」は、夫婦ゆかりの地あつみ温泉に行くと夫のエピソードを思い出し、「包んでもらわずにはいられない（略）みちのくの鄙びた餅の　幾つかを」と締めくくられている。温もりと懐かしさを抱かせるとちもちには、とちの実をおいしく食べるために工夫を重ねてきた先人たちの、古からの記憶が刻まれているのかもしれない。

行沢では、9月頃から共同の山に分け入ってとちの実を拾い、30日ほどの日時をかけてあくを抜き、庄内産もち米と自家製あんでとちもちを作っている。商品は3個入りと5個入り。産直あさひ・グーと産直あぐりで通年販売。発送も可。

行沢とちもち加工所 0235-53-3375
注文は産直あさひ・グーまで 0235-58-1455

（取材・文　長谷川結）

庄内俳句紀行

冬の海 大漁を待つ 由良漁港にて

立冬を迎え浜風の冷たさが一層増した頃庄内浜には冬の魚たちが揚がる。鶴岡の由良漁港へ向かった。

漁港に戻る船

季語 冬の海（ふゆのうみ）
寒風や荒波が押し寄せる荒涼とした海。凪いで陽光の眩しい日もあるが、沖の波は高いことが多い。

南北を約125キロメートルにわたって走る庄内浜は、場所によって砂浜だったり岩礁だったりと変化に富んでいる。鶴岡市街から国道7号を新潟方面へ向かい由良坂を過ぎると、右手に由良海岸がある。ここは、日本の渚100選に選ばれ、夏には多くの海水浴客で賑わい、その一方で漁港も有している。またこの地には、出羽三山の開祖といわれる蜂子皇子が丹後からここに辿り着いたという「八乙女浦の伝説」が残る。

磯舟のかるがると浮く冬の凪
—髙瀬武治郎

どこまでも青い空と青い海の間を一本の赤い橋が島へと延びる。白山島である。島の前では磯見漁の船が一隻、穏やかな海と長閑な景を作っていた。しかし、この時期の天候は変わりやすく、朝方漁に出た船が、午後からの悪天候に備え、早めに港に戻ってくるという。気がつくと、寒々しい雲が空を覆い始めていた。一隻の船がやがて底曳網漁から帰ってきた。

白山島と磯見漁

海坂にうすく雲ある冬の海
—國保八江

港がにわかに活気づく。船が着岸すると、浜で待っていた女性が、一膳のご飯が入った小さなおかもちを船長に差し出した。無事に漁から戻ったことに感謝して船の神様に捧げるのだという。船からは次々と魚箱が運び出された。

由良は古くから漁業が盛んで、豊富な魚介が水揚げされ、鮮度保持の技術にも優れるなど、好漁場として知られている。この日も鮟、蛸、蟹、太刀魚、鱈などが手際よく選別されていく。箱いっぱいの紅えびやガサえびが勢いよく跳ねる。今年も昨年に続き、鰰が不漁のようだ。

水揚げ作業

タグが付けられた楚蟹

ずわい蟹生きて正札睨みをり
—板倉れいじ

海猫が迎える中、また一隻戻ってきた。船内の生け簀から楚蟹を取り出し重さを量る。日本海の冬の風物詩でもある楚蟹。庄内浜では西日本より早い10月初旬から底曳網での漁が解禁されるため、福井の越前がにや鳥取の松葉がになどが出回る前に高値で取り引きされる。特に雄の楚蟹は由良では芳がにと呼ばれ、1匹ずつ、大きさに合わせて本物の証としてタグが付けられる。見るからに勇ましい蟹である。

トロ箱の芳蟹格を競ひ合ふ
—あべ小萩

港にはどんどん魚箱が並んでいく。魚たちの目はまだ輝き、その姿は美しく、季節を運ぶ豊かな海の幸を実感した。しかし年々獲れる魚種が変わり、海自体が変化していると浜の人たちは警笛を鳴らす。立冬を過ぎて日が落ちるのも早く、外では冷たい雨が降っていた。市場の中には競りの掛け声が力強く響いている。まもなく、冬怒濤の厳しい季節となる。

由良漁港での競り

協力＝山形県漁業協同組合 由良総括支所
写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）